

ロ | エル，ピケリング兩博士の憶ひ出

近江八幡 井リヤム・メレル・ヴォーリズ

1890年代といへば、私と弟とは共に十何歳代の少年で、米國アリゾナ州のフラグスタフ (Flagstaff) といふ町に居ましたが、その頃、天文學者パーシバル・ロ | エル (Percival Lowell) さんが自分の天文臺をこの町に建てたのでした。ロ | エルさんがこんな邊鄙な小さい町をわざわざ選んだのは、此所の空氣が極めて乾燥した清純で、夜空はそのため非常に美しく、星の眺めも特に明らかであり、また、雨の稀なために雲の邪魔も無いためでした。フラグスタフはアリゾナ州の北部の山岳地帯に在りまして、町そのものが海拔7000呎もあるので。私共の家庭はこの町へ“健康”を求めて移つて來たのですが、その後まもなく、パーシバル・ロ | エルさんは星を求めて此所へやつて來たのでした。

所謂“メサ”(Mesa) といふ類の丘陵地に建つ天文臺と、それへ登つて行く道路が建設されてゐる間、我々兄弟は、その工事の進められるのを見ながら、學校時代の幾つもの土曜日や休暇の日を過しました。

私は初めから建築術に興味をもつてゐましたので、特に天文臺の建て方に興味を惹かれました、望遠鏡を支へるための大きな土臺を突込むために、丘の上の堅い岩を爆破して作られた深い穴のことなど、私は今もよく覚えてゐます。道路工事に對する私共の興味は、その仕事が私共の2人の學校友達の父親によつて爲され、そして、友達も休日には父親の手傳ひをしてゐた事でした。私共が彼等の手助けをしたのが、或ひは、そこにゐて、むしろ邪魔をしたのか、どうもはつきり覚えてゐませんが、少くとも私共は毎日の楽しみにしてそれを見守り、御蔭で山路をならしたり、水吐きをつけたりすることを覺えました。

ロ | エルさんは、この小さい町では豪い人になりました。勿論、此の人は自分の仕事に極めて熱心だつたので、普通の意味で言ふ大變な社交家ではなかつたのですが、しかし、また、魚にだけ話をするやうな、かの“ニユーイングランドの田舎爺”といふ程でもありませんでした。理學研究心と、世間廣い見聞によつて、ロ | エルさんは一個の世界市民でした。私の幼い心に最も永く植え

つけられたロエルさんの印象は、云はば、妙な、いろいろ入りまじつたものでした。といふのは、私は、ロエルさんが非常に威厳のある人だとも思ひ、また“跳躍人形”^{ジャンピング・ヤツク}（これは木片をつぎ合せて作った人形で、紐をひつばると関節のところで自由に腰を曲げる）みたいな人だとも思つてゐました！

威厳のある人といふのは、其の大體の風采が教養のある紳士を思はせたのによるのですし、“跳躍人形”といふのは、このロエルさんが、街通りで人に出席した時などに、男にでも女にでも、帽子を取りながら極めて丁寧にお辭儀をする様子によるのでした。我々“西洋人”は、帽子をぬぐのは婦人に禮する時だけですし、お辭儀なんていふことは誰にもしない習はしでしたから、私がロエル博士の此の丁寧すぎるほど禮儀正しいことを口にしましたとき、ある人は、ロエルさんは多分日本に行つた時に覺えたのだらう、と言つてくれました。この事が日本について私の知つた最初の知識であつたと信じます！それで、私が未來の安住の地(日本)に足に向けたことについては、多分、このロエル天文臺も幾分かの役割を演じてゐたと言つて好いでせう。

ピケリング教授(W. H. Pickering)は自己の火星の研究を行ふために、ハーバード大學からロエル天文臺にやつて來たのです。——この研究はピケリング教授もロエル博士も二人とも特別な興味をもつてゐたものでした。

ロエル天文臺が火星に生物のゐる證據を見つけた、といふやうな、或ひは灌漑用の水路が見えたり、火星の春の季節に青々と繁る植物によつて、田畑のあることが認められる、といふやうな、びつくりするやうなことをほめかけたり、また、さう云つた興味の深い想像によつて、この地方の週刊新聞が、いつも我々をどのやうに興奮させてゐたか、を私は今尚覺えてゐます。私は、また、人々が然るべき夜に、天文臺へ來るやうに招かれる習はしであつたこと、そして、私自身がロエルさんの望遠鏡で月や、土星の輪を、生れて初めて見たことなどを覺えてゐます。

ピケリングさんと、ダグラス(Douglass)さんは、二人ともロエル天文臺には暫く滞在してゐました。お二人共、ロエル博士よりも若くて、しばしば我々の友達の家や、また我々の家庭にもやつて來ましたので、私共はお二人をウソとよく知るやうになりました。

ダグラス博士は、後に、アリゾナ大學(博士は今でもこの大學にをられる)に於る研究、即ち、アリゾナ州にある有史以前の絶壁家屋に見出される古い木材の年輪によつて氣候の循環期を發見したことで有名になりました。私は博士に最近にも度々出會ひました。

私の覚えでは、どちらかと云へばピケリング博士は太つた方で、髪は褐色で顎鬚がありました——この顎鬚のために、博士は年齢の割合には幾分老けて見えました。大變親切な、聲のやさしい紳士で、自分の出會ふいかなる人にも、またいかなる話にも興味を感じるもののやうでした。博士は其の深い學識を持ちながら、しかも又一種溫い人柄をも、私のやうな一介の少年にさへ感じさせました。

ロリエル博士は人一倍世事に無關心なやうに思はれました。私はその後もフラグスタフの町を幾度か訪れましたが、例へば1925年の折に、この天文臺の構内にある博士の墓に詣つたとき、私は博士のこの偉大な人格の姿を了解することが出来ました。その墓標には博士の著作から引いた言葉が刻まれてゐます。その言葉をはつきりとは憶ひ出せませぬが、それは、天文學を深く學ばんとするものは、孤獨の生活を送る心構へがなくてはならぬ、といった意味のものでした。この言葉は、この世をより良くするために自分一個の安樂や利益を犠牲に供する豫言者や開拓者達の全てに對しても等しく當てはまることであります。パシゲル・ロリエル先生は自分の時間を捧げたのみか、自身の給料までも差出し、私財をなげうつて彼の天文臺を建てたのでした。先生は、些かの利益にも動かされず、眞理を愛する理學者でした。先生はその同じ時代の人々に對しては、或は孤獨であつたかもしれませぬが、しかし、先生は、あらゆるものの中で最も卓越した社會——即ち、人類の歴史を作る人々の一人であるのです。(昭和13年4月19日、山本進譯)

「天界」原稿・寫眞募集

天界にふさはしい原稿や寫眞をどしどし御送り下さい。

★投稿先は 京都市左京都吉田泉殿町59 山本 進方

「天界」編輯部